

依田義賢シナリオ集

西鶴一代女

雨月物語

大阪物語

花の吉原百人斬り

日本映画史に燦然と輝く
数々の名作を創り出した
シナリオ界の名匠が
人間の業を極限までみつめて
描出した脚本の粹!!

依田義賢シナリオ集

¥980

昭和53年11月5日初版発行

1978©

著 者 依 田 義 賢

発行者 松 本 孝 二

印 刷 東銀座印刷出版㈱

発行所 株式会社映 人 社

〒170 東京都豊島区東池袋
5-32-10 秋葉ビル1F
TEL 03 585—0965

0274—00104—0665

落丁乱丁本はお取替えいたします。

依田義賢シナリオ集

西鶴一代女

雨月物語

大阪物語

花の吉原百人斬り



映人社

目次

西鶴一代女	5
ノート	75
雨月物語	77
ノート	136
大阪物語	137
ノート	203
花の吉原百人斬り	205
ノート	277
〈解説〉 佐藤忠男	278

西鶴一代女

〈スタッフ〉

製作 原作 構成 監督 撮影 美術 音楽

児井 井 溝 溝 平 水 斎
英 西 健 健 野 谷 藤
雄 鶴 二 二 好 浩 一
郎

〈キャスト〉

お 勝 奥 扇 笹 番
春 之 方 弥 屋 頭
田 介 吉 衛 文
中 春 門 衛 吉

田 三 山 宇 菅 進 大
中 船 根 野 井 藤 泉
絹 敏 寿 重 一 英
代 郎 子 吉 郎 太
滉

菊 小 菱 屋 磯 田 侍 老 笹 松 小 寺 所 侍 丸 笹
路 太 部 舍 局 女 女 屋 平 春 町 司 女 屋 大
三 太 弥 大 吉 岩 妙 女 房 晴 母 中 代 袖 番 番
郎 衛 門 岡 橋 海 佐 隆 とも 将 人 垣 頭 頭 治
平

清 加 小 柳 浜 市 毛 沢 近 松 津 坂 草 石 志
水 東 川 川 田 川 利 村 衛 浦 路 内 島 原 賀
将 大 虎 永 百 春 菊 貞 敏 築 清 永 競 須 磨 磨
夫 介 之 二 合 代 枝 子 明 枝 三 子 子 磨 慶

児井プロ・新東宝

一九五二年 度 作品
四月十七日 封切 一三七分

1 奈良の町

冬の夜明け前。

靄のたれこめている薄明の中に、しずまっている、町、嫩草山。

寺々の明けの鐘が鳴りわたる。

池のほとりの靄について、巡礼の一团が通つてゆく。

2 町はずれ、木辻のあたり

裏町に続いた荒れ寺の門前。

ここも靄が深い。

そのなかから、女が寒そうにやってくる。

見た眼には、二十そこそこの派手な振袖をつ

け、真白に白粉を塗っているが、年はもう五十に近い女で、惣嫁そうめと呼ばれている、卑しい売女

のお春である。

情なさそうな顔をしている。

向うから同じ仲間のお仙とお杉がやってくる。

お仙「お春かア」

お春「……」

お仙「お前も客がつかなんだか」

お春「(淋しく笑って) 五十の婆はたちアが二十歳になる

のはむりじゃなア」

お杉「お前からそう思うてしもたら、あかんがな」

お春「巡礼宿から爺いさまに呼ばれてなア」

お杉「ほう」

お春「これは客がついたと喜んで、はいつたところ

がおまえ、念仏講のように、ろうそくをあか

あかにとぼして」

お仙「ろうそくを？」

お春「(うなずいて)若い者のいならぶ前で、どうや

この化けようは、それでも女遊びをしたいか

などいうて……」

お杉「ハハハ」

お春「なんのことはない、因果もんの見世物やない

か」

お杉「ハハハ、そら初店から、えらい目に逢うたな

ア」

ふとお杉が、荒れ寺の境内に眼を転じると、

お杉「(喜んで)お仙またやってくれてるで」

お仙が望むと、境内の遠くに焚火の火が見える。

お仙「有難い。温くもって、帰ろうか」

3 荒れ寺の境内

羅漢堂の縁の下に、乞食が焚火をしている。

そこへ、お春たちやってくる。

お仙「おっさん、あたらしてや」

乞食は無愛想にうなずく。

焚火の明りの中にかがむ、お春たち。

お仙「(お春に)御所にまであがつていたというお

前が……年よってこんなことするとは、思い

もせなんだやろなア」

お杉「なんで、こうまでおちぶれたんやな」

お春「昔のことは聞かんといてくれ」

寺の僧侶が羅漢堂へやってくる。

僧侶「これ、またそんなところで、火を焚いて……焚

いてもええが、気をつけておくれや」

お杉「へえへえ、気をつけまっさ。心配すると頭が

……そうか、はげようはないか」

どつと笑ったので、僧侶はくさって羅漢堂に入



4

羅漢堂の中

お春は入口から、そつと中を伺う。

燈明のあかりをうけて、羅漢像が立ちならんでいる。

それぞれ特徴のある様々の顔をしている。

お春の眼がふと一つところに注がれる。

がっちりとした若い顔の羅漢像。

お春の注いだ目になつかしげに潤う。

その羅漢像の顔が、公卿の若党、勝之介の顔になる。

お春はにっこり笑ったが、すぐ笑顔を失って、

5 御所の参内口の門

晩秋の朝。

年若いお春が美しく着飾って、門の内よりいそいそと出て来て、待っていた駕籠に乘ろうとする。

参内口から公卿の菊小路が、若党の勝之介をともなつて帰ってくる。

勝之介はいち早くお春の姿をみとめ、頬を染めて眼を落す。

お春は心安く迎えて、会釈をする。

菊小路は笑顔で近寄る。

菊小路「美しゅうして……何処へ」

お春「はい、旦那様の御用で、下御霊さまへ初穂料

しみじみと思い出を辿る面持になる。(O・L)



をお届けに参ります」

菊小路「それは御苦労さま。めったに外へは出られ

ぬから、方々見物してくるとよいな」

お春「そんなことをしては叱られます……」

菊小路「しめし合わせたむきでもあるのではない

か」

お春「菊小路さまは、御宿直^{おとりのい}で」

菊小路「そうだ（にやりとなって声を落し）西洞院

がそなたから歌の返しが来ないと云うて、気

をもんでおったぞ」

お春「（はじらいの眼をあげ、なじるように）西洞

院さまは……なんでもお喋りになるのでござ

いますね」

菊小路「ずいぶんあつかましい歌を贈ったらしいな

……どんな歌だ」

お春「存じません」

お春は逃げるように、駕籠の中に入る。

菊小路は笑いをおくって、立ち去る。

勝之介は苦々しい顔で従いながら、かつぎ出される駕籠を見送って、何か思入れる。

6 御所の附近

松並木の間をお春を乗せた駕籠が行く。

駕籠の中でお春は菊小路の言葉を思いうかべて、愉快になってくすりとなるとき、

「お春さま」

と追って来る声に、ぎくつとなる。

駕籠の外に勝之介が来ている。

勝之介「（おずおずと愛想笑いで駕籠の中に向い）勝之介でございます。殿さまが折入ってお話申

したいことがございますので、申しかねますが、ちょっと寺町の知り合いの家へお立寄り願いたいと……」

勝之介の足もとがふるえている。

お春は、駕籠のうちより戸をあける。

お春「（困って）なにぶんお使いに参じますので

……」

勝之介「えっ、あの、お使いのあとでも結構でございます。ちょっと間をおさき下さいます……」

7 寺町の中宿の玄関

小さいもたやの暗い玄関の土間へ、勝之介と

一緒に入ってくるお春。

玄人上りらしい年増の女あるじが迎え出る。

女あるじ「おいでなさいませ」

勝之介「菊小路さまが後より見えるが、ちょっと座

敷を……」

女あるじ「はいはいどうぞ……」

勝之介「さあ、お上り下さいまし」

勝之介はお春を促し、奥の座敷へ。

8 座敷

女あるじに従って、勝之介とお春が入ってくる。

お春を上座に、勝之介は下って、神妙に向き合う。

女あるじが出てゆくと、二人は気まづくなる。

勝之介「（おずおずと）お春さま……お読み下さい

ましたか、先日お渡し申した手紙……」

お春「（見下げた態度で睨みつけ）誰が読みますも

のか、お前のような若党風情のもの……少し

も読まずに焚いてしまいました」

勝之介は落胆して、悲しく眼をおとす。

いよいよ気まづい二人。

勝之介「御身分高いお方々からお慕われになっているお春さまに、わたくしなどが心を通わせてはおこがましいとお思になるかも知れませんが」

お春「……」

勝之介「身分では皆さまに叶わずとも、お慕いする心の上でなら、決してひけをとりません」

お春「……」

勝之介「わたくしには歌をよむ才もなければ氣の利いた洒落をあやつる頓智もありません。しかし、わたくしは真心を持っております。お春さまはわたくしの身分をお見下げにはなれて

も、わたくしの真心をお見下げになることは

出来ません」

お春「……」

勝之介「鞆やお弓と同じように、心を言葉のもてあそびにして、それがみやびというのなら、わたくしはそのような……」

お春「お前などにみやびの心など分るものですか」

勝之介「皆さまは言葉の綾の糸とりをなさり、その間に大事の恋をお手玉のようにとられて、興がっていらつしやる」

お春「上品な皆さまのお趣味はお前には分りません」

勝之介「それなら、皆さまのうちに、しんじつお春さまをお思いなされているお方がございますか。お春さまと夫婦めとになつて、仕合わせな世帯を送ろうという……」

お春「帰っておくれ……」

勝之介「わたしは、お春さまのお仕合わせを思うて云うのでございます」

お春「よけいなことです」

勝之介「お春さまが、わたしという人間からしてお嫌いなら、いさぎよく諦めます」

お春「ええ嫌いです」

勝之介「もし、身分がいやしいからと云うので、お嫌いなさるのなら、わたしはこの恋叶わせでおきません」

お春「帰っておくれ」

勝之介「お春さま、人間は、いえ、女はしんじつな思いに結ばれて生きてこそはじめて仕合わせなのでございますよ」

お春「（強く）帰っておくれというに。お前の話を

聞きに來たのではない。あたし一人、菊小路さ

まをお待ちする……帰っておくれ」

勝之介「（首をたれて心を決めたように）殿さまは

お見えになりません」

お春は顔いろをかえて、立ち上り、帰ろうとする。

勝之介「お待ち下さいまし」

勝之介はお春の袖をとらえる。

勝之介「悪うございました。けれども、どのように

しても、お春さまに逢いたかったのでござい

ます」

お春は袖をふりきろうとする。勝之介はしっか

りとつかんではなさぬ。

勝之介「御所にお上りなされた時より折々垣間見る

お姿にも、せつなく心かよわせて参ったので

ございます。どうぞ、この恋、叶えて下さり

ませ」

お春「（泣きそうになり）お前の手紙は読んだので

す。お前がどのようなことを書いてよこして

も、わたしとお前は一緒になれないのです」

勝之介「なぜでございます」

お春「御所でも、お父さまでもお許しにならぬこと

はわかっております」

勝之介「そんなら、逃げるまででございます」

お春「……」

勝之介「逃げて二人の世帯を持ちましょう。大事に

かけます。きっと仕合わせにお守り申しま

す」

お春は両手で顔を蔽うと、その場に坐って泣い

て了う。

勝之介は思いきってお春を抱きよせる。